ま　え　が　き

I

わが国における発展途上国への関心の中で，アフリカへの関心ほど多種多様なものはなかろう。学問的関心に限っても，政治・経済・社会・人類・歴史・地理など，各領域における対象分析の範囲と方法は実に多岐にわたっている。逆にいえば，アフリカ研究に関するかぎり，厳密な意味での個別的な社会科学的接近は，それだけ稀薄であるといえるだろう。しかし，そのことにはそれなりの理由があるように思われる。つまり，アフリカ諸国に現在見いだされる事象には，既成の社会科学的概念をもってしては容易に説明しきれない要素があまりに多く含まれている，ということではなかろうか？　歴史学に例をとれば，アフリカには，アラブ人やポルトガル人の手になるわずかな史料を除いて，アフリカ人自身によって文字に記録された古文書は存在しないため，既存の歴史記述的研究成果を潜在的な基礎知識として，その中から適宜取捨選択することによって現代史研究を構成することがほとんど不可能となる。アフリカ史研究者が，時代区分をしたり個々の史実の相関関係を明らかにするためには，まず考古学者や人類学者による遺跡，遺物の調査や口承伝説の蒐集の成果をまたなければならない。つまり，研究者が，事実をして語らしめるだけにとどまらずに，事実そのものを即自的にも表現することと，その事実そのもののもつ本質的性格を世界史の中に位置づけること，とのあいだにある緊張関係は，アフリカ研究の場合，極度に高められるのである。少なくとも，現在の時点では，研究者がおかれている状況の中でぎりぎりの抵抗として実感される自己存在への意識と，アフリカ諸国において受動的に認識のレベルにとり込まれた事実とのあいだには，気の遠くなるような距離感があり，研究者にとって，現状分析のむずかしさがしばしば原理論をはるか手の届かぬ所に押しやってしまう。そして，そのことは，ややもすれば，研究者の主体的な姿勢を崩れさせ，あるいは積極的な思考を鈍らせて，安易な決疑論や，デスペレートな人間論に陥らせる危険を伴うのである。研究者が主体性を主張すればするほど，主体性そのものを失いがちだというこの逆説的な状況は，研究者の内面にある一種の甘美なパトスの領域と背中合わせになっている。とすれば，アフリカ大陸がさまざまな社会・経済的事象を広い空間の中に呑み込んでいるかぎり，アフリカ研究者にとって，つねに現状分析と原理論とのあいだにいくつかの中間項を設定する努力を怠らぬことがなによりも必要だと考えるのである。

II

「アフリカ特集号」は，1966年12月号，および1968年1月号についで，これが第3回目の刊行である。第1回目は，執筆者相互間で十分理論上の統一課題が定められぬままに，アフリカに対する西欧諸国のインパクトとそれに対する反応という「脱植民地化」の力学をおおまかに想定し，政治的独立後における経済的自立の条件の中から，執筆者が各専門領域内でもっとも重要と思われる事項を選定・追求すること

とした。第2回目は，研究の焦点を，アフリカ経済の自立的発展過程における国家の役割にしぼり，各地域について，国内流通経路の再編成，土地の国有化，基幹産業の国営化，金融・貿易の国家管理などをめぐる問題点をそれぞれ明らかにした。さて，第3回目の本特集号は，従来の研究をふまえたうえで，国家のイニシアティブによるアフリカ経済の自立化を，植民地的従属のもとにおかれていた諸制度を自主的に調整していく「アフリカ(人)化」の問題としてばかりでなく，同時にまた，その基盤となっている部族共同体を開放的に拡大していく「脱部族化」の問題としても捉えようとする。換言すれば，アフリカ諸国における国民国家，ないし国民経済の成立を，単に機能的な側面から検討するだけでなく，さらに一歩進んで構造的な側面から把握することが意図されているのである。

III

日野論文（「東アフリカにおけるスワヒリについて」）は，執筆者の東アフリカにおける豊富な実態調査の結果に依拠しつつ，スワヒリ諸住民の歴史的・社会学的コンフィジュレイションを試みたものであり，その場合，「スワヒリ化」の本質は，「イスラム化」としてよりも，むしろ「脱部族化」として捉えられるべきことが強調されている。

細見論文（「ガーナにおけるココア農業の拡大と農民の金融的従属」）は，ガーナのココア生産が20世紀初頭から第2次世界大戦まで驚異的拡大を示したにもかかわらず，その間ココア農民がたえず仲買人，高利貸に従属せざるをえなかった事情に着目し，その原因を，執筆者が「消費先行型」経済と規定するガーナの伝統的社会に関連づけながら究明している。

原口論文（「チュニジアにおける農業改革――農業生産協同組合に関する一考察」）は，チュニジアのデストゥール社会主義の農業部門における基本的政策として，特に農業生産協同組合の創設に注目し，執筆者の一カ年にわたるチュニジア滞在中の知見に基づいて，その意義と問題点を分析している。

吉田論文（「東アフリカにおける農産物販売機構のアフリカ人化――綿化およびコーヒー販売協同組合の形成過程」）は，東アフリカ3国における農産物販売機構の「アフリカ人化」を，政府によるアフリカ人販売協同組合の育成過程として捉え，特に綿花とコーヒーについて，1952年以降の東アフリカ3国における機構改革の経緯を分析し，変革をもたらした主体，動機および結果などを多角的に検討している。

星論文（「ローデシアの『原住民指定地』と『原住民購入地』」）は，ローデシア政府がアフリカ人に私有地として与えた「原住民購入地」を，伝統的な共同体的土地保有のもとにある「原住民指定地」と対置させることによって，「原住民購入地」創設の意味を，アフリカ人「脱部族化」との関連から評価している。

（星　　昭）